

京都大学教育研究振興財団助成事業
成果報告書

平成28年8月6日

公益財団法人京都大学教育研究振興財団
会長 辻井昭雄様

所属部局・研究科 文学研究科

職名・学年 博士後期課程3年

氏名 岡村太郎

助成の種類	平成28年度・若手研究者在外研究支援・国際研究集会発表助成		
研究集会名	第43回国際ヒューム学会		
発表題目	Hume on distinctions of reason: A resemblance-first interpretation		
開催場所	シドニー大学(オーストラリア・シドニー)		
渡航期間	平成28年7月18日 ~ 平成28年7月24日		
成果の概要	タイトルは「成果の概要／報告者名」として、A4版2000字程度・和文で作成し、添付して下さい。「成果の概要」以外に添付する資料 <input checked="" type="checkbox"/> 無 <input type="checkbox"/> 有()		
会計報告	交付を受けた助成金額	250,000円	
	使用した助成金額	250,000円	
	返納すべき助成金額	0円	
	助成金の使途内訳	航空運賃・移動費:	110,000円
		宿泊費:	60,000円
		滞在費:	55,000円
		大会参加費:	25,000円
当財団の助成について	今回、学会に参加したことは、非常に貴重な経験となりました。私はまだ学生であり、十分な研究資金を有していないため、貴財団の援助がなかったらこの発表は叶いませんでした。若い研究者にこうした機会を与えてくださることに深く感謝申し上げます。		

今回の発表助成により報告者は、2016年7月19日から23日にかけて、オーストラリア・シドニー大学で開催された第43回国際ヒューム学会に参加した。その成果を以下に記したい。

発表の概要と成果

18世紀スコットランドの哲学者であるデイヴィッド・ヒュームの「理性的区別 distinctions of reason」についての理論は、今もなお大きな影響力を有している。ヒュームの経験主義によれば、個別的な性質を離れた抽象的な性質は認められない。これは「分離原則」という原理に基づいている。この原理から、「別々に思考不可能であるものは同一である」ことが導かれる。例えば色なしの形など思考不可能であるから、色と形は、ある意味で同一であることになる。しかし、われわれがそれらを区別していることは疑い得ない。ときにわれわれは色に注目し、形に注目することができる。ここで、いかにして実在のレベルでは同一であるものをわれわれは区別できるのか、という問題が生じる。このような、実在的区別とは異なる、われわれの判断のレベルでの区別が「理性的区別」であり、ヒュームが説明しようと試みたものである。この説明において重要な役割を果たすのが「類似性 resemblance」という関係であり、これをどう理解するかが、理性的区別の理解に深く関わってくる。

類似性についての解釈は、これまでは類似点先行説 respect-first view が優勢であった。これによれば、何かは何かに類似するということは、それぞれの対象がもつ類似点に基づいている。たとえば白い円と白い四角は、白という点で類似しており、形という点では異なっている。これに基づいて、理性的区別は以下のように理解される。色と形は同一だが、対象が他の対象に対してもつ類似性と、相違性によって、われわれはそれらを区別することができる。たとえば白い円は、白という点で白い四角に類似し、形という点で相違する。この相違によって色という点での類似性が浮き彫りになり、これによってわれわれは白い四角に「白」を見出すことができるようになる。

しかし、Baxter (2011)が指摘するところによれば、この説明と先の「分離原則」を組み合わせると矛盾が生じる。類似点先行説によれば、白い円と白い四角はそれぞれの点において類似し、相違する。しかし分離原則によれば色と形は同一でなければならないのだから、類似点と相違点も同一でなければならない。すると、同じ点において、白い円は白い四角に類似し、かつ相違するという矛盾が帰結する。

この問題に対して私は、そもそも「類似点先行説」がそもそもヒュームの解釈として誤っていることを指摘し、この類似性の見解を取らなければ矛盾は生じないことを論じた。代替案として私は、類似関係は、われわれが類似点を特定することなく成立

するという「類似関係先行説」を提示した。ある対象が複数の性質をもつという事実は、その対象が持つ性質のタイプにではなく、その対象が他の対象に対してもつ類似関係のタイプに基づいている。これはヒューム解釈として適切であるだけでなく、Baxter が指摘した矛盾を回避できる。私の見解によれば、白い円と白い四角の間に「相違関係」というものはない。したがって、同じものが他のものに類似しかつ「相違する」という事態は生じない。これは必ずしも対象の間の「相違」を理解不可能にするものではない。あるものがあるものに似ていないということは、それが互いに異なるタイプの類似性を有するというに基いて、類似点および相違点に言及することなく説明されるのである。以上のように、類似関係先行説は、ヒュームの解釈として適切であり、矛盾を回避でき、類似性についての新規な見方を与えるものであることが示された。

こうした発表について、概ね良い評価を受けた。雑誌論文に投稿を勧めたり、こうした類似性論の進むべき新たな可能性を指摘してくれる人もいた。この発表の細部を詰めて論文にすれば、学界に貢献できるものができるだろうという自信を得ることができた。自分の発表以外にも、この学会は大変充実したものであった。年齢や地位にかかわらず皆が丁寧に議論に付き合ってくれた。また夕食会やイベント等を通じて、様々な形で交流を深めることができた。こうした関係は、これから研究を進めるにあたって貴重なものになっていくように思う。

このような経験をすることができたのは、貴財団の援助を受けることができたからである。ここに深く感謝の意を表したい。